

I 蚕糸業の概況

1 養蚕業の動向

平成 17 年度における養蚕業は、養蚕従事者の高齢化及び後継者不足による労働力事情等により、飼育中止や掃き立て規模を縮小する農家が増加したことから、養蚕農家数、掃立卵量及び収繭量とも前年に比べて大幅に減少した。

- (1) 養蚕農家数は 1,591 戸で、前年に比べて 259 戸（14%）減少した。
- (2) 桑栽培面積は 2,988ha、桑使用面積は 1,582ha で、前年に比べてそれぞれ 421ha（12%）、194ha（11%）減少した。
- (3) 飼育箱数は 18,435 箱で、前年に比べて 2,217 箱（11%）減少した。
- (4) 箱当たり収繭量は 34.0 kg で、前年に比べてやや増加した。
- (5) 収繭量は 626t で、前年に比べて 57 トン（8%）減少した。
- (6) 1 戸当たり飼育箱数は 11.6 箱、1 戸当たり収繭量は 394 kg で、ともに前年より増加した。

（資料「平成 17 年度蚕業に関する参考統計」生産局特産振興課調べ）

2 製糸業の動向

平成 17 年度における製糸業の動向は、原料繭の減少、生糸価格の低迷により製糸設備の運転率及び生糸生産量は前年に引き続き減少した。

- (1) 器械製糸工場数（17 年 12 月末の運転工場数）は、2 工場で前年に比べて 3 工場減少した。
- (2) 製糸設備台（釜）数（17 年 12 月末）は 124 台、1 日平均運転台（釜）数は 92 台で、運転率は 74.2% となっており、前年に比べて製糸設備台（釜）数は 298 台（70.6%）減少、1 日平均運転台（釜）数は 173 台（65.3%）で、ともに大幅に減少した。
- (3) 生糸生産量（17 生糸年度）は 2,024 俵で、前年に比べて 1,844 俵（47.7%）減少した。また、生糸の織度別割合は 18 中以下が 0.3%、21 中が 12.9%、27 中が 25.2%、31 中が 35.9%、その他が 25.6% となった。
- (4) 製糸工場の原料繭需給（17 生糸年度）は、受入数量が 839 トンと前年比 20.5% 減少したものの、消費数量が 673 トンと前年比 47.4% も減少した結果、期末在庫数量は 390 トンと前年比 74% の増加となった。

3 生糸の国内需給及び価格の動向

17 生糸年度の生糸需給についてみると、生産は 2,024 俵と前年比 47.7% 減少し、輸入は 26,365 俵で前年比 30.8% 増加した。この結果、期末在庫は 9,926 俵と前年比 36.5% の増加となった。また、生糸の国内引渡数量は 25,737 俵と前年比 4.7% の減少を示した。

なお、17 生糸年度の機構における外国産生糸の買入れ及び売戻しは、16 生糸年度の輸入実績が 17 年 1 月以降に絹糸・絹織物の輸入が自由化した影響を受け、前年度を大きく下回ったのに対し、26,365 俵（実需者輸入分 26,365 俵、一般者輸入分なし）と前年に比べて 30.8% の増加となった。

国産生糸の市場価格は、かつては輸入生糸価格を上回って推移してきたが、そのシェアの激減による価格形成力の喪失、品質格差の縮小等により、近年、主産国での生産状況・海外市況、仕手筋の介入等の要因により変動している。17 生糸年度

は、中国における秋繭の大幅な減産及びインド、ヨーロッパ向けの生糸輸出が好調に推移したこと等を背景に日本向け輸出価格が上昇したことにより、17年8月以降、上昇傾向となり、翌年2月には4,733円にまで上昇した。その後は、概ね4,000円から4,500円台で推移した。